

資料⑤ 「授かった命」に向き合う

私は横手で育ち、今は京都で暮らしています。子どもの頃は寒さが当たり前の日常で、大変さを感じつつも、地域みんなで助け合いながら暮らしていました。都会に出てからは、雪のない便利な生活に慣れた反面、自然と直接向き合う機会が減り、その大切さを忘れかけていたように思います。記事を読み、雪国の人々が今も工夫し知恵を受け継いで自然と共生している姿を知り、懐かしさと同時に尊さを実感しました。人は自然を完全に支配することはできません。だからこそ、もっと自然と共に生きる意識を持ち、都会に住む自分も学び直していきたいと思います。

この資料を読んでも、マタギの世界で獲物を狩ることに対して「授かる」という表現が使われていることに不思議な感覚を覚えました。一般的に「命」という言葉には「奪う」という表現が結びつきやすいと思います。しかし読み進めていくうちに、相当な覚悟をもって命と向き合っているからこそ、「授かる」という表現を用いているのだと気付かされました。人に危害を加える野生動物を相手にする場面では、自分の行動を正当化してしまいそうになるはずです。そんな中で、自分を削りながらも授かった命と真摯に向き合う永沢さんの姿にとっても強さを感じました。永沢さんの姿勢から命を奪うことと授かることは表裏一体であり、そこには深い敬意と責任があるのだと学びました。